

弊紙「今週の倫理」は今号で第八〇〇号を迎えます。第一号は平成9年9月1日号ですので、今年の8月末でちょうど15年が経過し、9月からは16年目に突入しています。

会員の皆様におかれましては、毎号ご愛読いただき感謝申し上げます。今後とも自身の倫理実践の道連れとして、さらには「愛顧いただきますようお願い致します」。

今号はこの「節目」を迎えることについてです。一口に「節目」と言っても、今回のようにある一定の年月を経たことによる時間的な「節目」と、もう一つは「己の身の回り」で起こる出来事により、もたらされる「節目」とがあります。

前者は、企業や様々な組織において、「創立」「周年」という節目に式典を開催し、記念誌等を編纂したりすることが代表例でしょう。その意義は、周年に至るまでの有形無形の尽力に対し、感謝と敬意を新たにすることであり、目指すべき方向を再確認することです。それはあたかも、竹が「節」を持つことにより強靱なしなりを得ることになぞらえられます。

後者は、本人の周囲で起こる重大な出来事により、環境が大きく変化をすることです。その多くは「あの出来事が節目になって……」など、事後になって実感する場合もあるものです。例えば、iPS細胞の研究によりノーベル生理学・医学賞を受賞した、京都大学・山中伸弥教授の例なども、その範疇であるといえるでしょう。

人生の節目とは 「初心」確認の絶好機



絵・今谷 鉄柱

両者に共通するのは、奇しくも山中教授が受賞後に今の気持ちの色紙に書くよう求められ、そして迷わず書いた「初心」という言葉ではないでしょうか。

氏は「研修医時代に父を亡くしたが、どこかで見守ってくれている。その父に替わってもらうのが一番の目標。研究者を目指した最初の日に戻って、また(研究を)やりたい」とインタビューで答えています。

「節目」を迎えるにあたっては、その物事に志す際の「初心」や、これまで支えてくれた方々の厚情を今一度確認することが必要です。同時に、それらに精一杯応えようとする感謝の念から湧き出るエネルギーを全身に漲らせつつ、次なる「節目」へ向けて再出発することが求められます。

ある機械加工を扱う企業の創業経営者は、創業時に購入し、最初のパートナーとなった工作機械に「初心号」と名付けたそうです。型が古くなって使われなくなってきたから、その機械をピカピカに磨き上げ、会社の正面玄関に飾り、お客様を迎えています。

『万人幸福の筈』第十二条には、「開店の日のいきごみと、友人のよせられた厚意を忘れるから、少しの困難にも、気をくじかせる」と記されています。

間もなく今年も締めくくりの時期を迎えます。自分自身の「初心」の状況を検証しつつ、この一年間の総決算としての「節目」をしっかりと意識し、来たる平成25年のスタートへとつなげたいものです。